

玩具映画および映画復元・調査・研究プロジェクト2（通称：玩具映画プロジェクト）

玩具映画と錦影絵の復元

研究年度・期間：平成16年度

研究ディレクター：太田 米男
(映像学科 教授)

共同研究者：中島 貞夫
(映像学科 教授)

豊原 正智
(芸術計画学科 教授)

池田 光恵
(芸術計画学科 助教授)

藤岡 幹嗣
(藝術研究所 嘱託助手)

学外共同研究者：松本 夏樹
(芸術計画学科 非常勤講師)

小山 帥人
(映像学科 非常勤講師)

宮島 正弘
(映像学科 非常勤講師)

常石 史子
(東京国立近代美術館フィルムセンター-映画係 研究員)

森脇 清隆
(京都府京都文化博物館 文芸1課 学芸員主任)

安井 喜雄
(フナネット映画資料 図書館代表)

上倉 庸敬
(大阪大学文学部 教授)

富田 美香
(立命館大学文学部 助教授)

石原 香絵
(東京国立近代美術館フィルムセンター-映画係)

五影 雅和
(角川大映映画映像事業部ビデオ グラムグループ プロデューサー)

野中 和隆
(アニメ作家)

平田 泰規
(ビデオ作家)

須佐 見成
(IMAGICA ウエスト フィルム事業部 部長)

ジョアン・R・バネティ
(ロチェスター大学 Japanese & Film 准教授)

玩具映画プロジェクトも、今年で2年目に入り、このプロジェクトの大きな柱である35mm玩具フィルムとの復元と、そのルーツと言うべき、「錦影絵」の復元を並行して行なうことになった。

〔玩具映画に関して〕

前年より収集した300本以上の玩具映画フィルムを、IMAGICA ウエスト（現像所）で、修復を行ない（前年に、時代劇関係はほぼ終了）、出来るだけ多くのフィルムの助命が課題であった。当初、5割近いフィルムが収縮や破損のため、光学焼付機 オプチカル・プリンターに通らず、復元が難しいという返事であった。具体的な原因を究明した結果、本来映写用フィルムである筈の35mmポジ・フィルム（パーフォレーション 掻き落とし穴 が小さく縮み、歪みになどの原因で、機械に通らないと思われていた）が、実はネガ目であることが判明した。調査の結果、再生フィルムの市場があり、ネガ・フィルムも玩具用に使用されていたことが判明した。このネガ目のフィルムをどのように再生するかが最大の課題であった。IMAGICA ウエストの復元チームの協力により、光学焼付機の改造（スプロケットの爪を片側にし、レジストレーション・ピンを外し、クローピンを研磨するなど、復元専用機に改造）によって、ほぼ全てに近いフィルムの復元が可能になった。加水分解など、あまりにも劣化の激しいフィルムは排除しても、330本の作品は確保できることになり、この点では、産学協同プロジェクトの企業協力という意義は大きく、IMAGICA ウエストも、映画復元の専門のラボとして著しい進歩を遂げるようになった。ジャンル別、カラーかモノクロか、ネガ目かポジ目かなど巻別に整理したフィルムを、その保存状態に合わせての復元を行なった。以下、フィルムからフィルムへの具体的な復元工程について。

- 1、玩具映画及び映画フィルムの収集。（平成15年度より引き続き、収集。現在360本（作業中も含め）。）

- 2、フィルムの修復～IMAGICAウエストでの作業。縮みや歪み、スプライスの不備、パーフォーレーションの破損、乳剤剥離、加水分解など。作業不可のフィルムによる劣化・消滅への調査。
- 3、作業分類～コレクター別、着色カラー or モノクロ、パーフォーレーション（ネガ目、ポジ目）破損状態など。
- 4、テレシネ～ビデオ化による調査とリスト化。作品名や内容の調査。
- 5、フィルム復元～デュープ・ネガ（DN＝復元原版）作成 保存。オリジナルの保存は一部で、大半をコレクターへの返還。染色・調色・彩色フィルムはカラー・ネガによる複製。白黒はモノクロ複製ネガで作成。
- 6、ラッシュ・プリント作成。カラー・モノクロ別。
- 7、ビデオ化 DVDなど映像の活用。（現在、検討中）

以上の流れによる時代劇映画や動画映画の復元作業はほぼ終え、フィルムによる活用として、第4回京都映画祭・関連企画で、玩具映画の紹介と実演を行い、また映画祭の一環として「三条あかり景色」では、玩具映画のチャンバラ・シーンをビデオ・プロジェクターで、町家やビルの壁に投影するプロジェクトにも参加し、玩具映画の存在をアピールした。

今後の計画として、復元した映像を映画祭での発表や、DVD化などによって、他分野からのアプローチを期待している。映像史や風俗史、世相史など、玩具映画の活用は多くなる。映画復元としてのプロジェクトと、そのソフトによる研究活用を図って行きたい。

〔錦影絵に関して〕

大阪歴史博物館所蔵の種板「池田の猪飼い」を提供して頂き、複製種板と風呂（投影機）を復元。また、芸術計画学科では、アート・プロジェクトという講座で、学生参加の授業として「錦影絵」を取り上げて頂き、ワークショップを行なった。

〔藝術研究所主催の教員発表〕1月11日に、「TOY FILM PROJECT 甦る玩具映画！」と題して発表。

発表日時 2005年1月11日 13時20分～16時30分。会場 本学AVホール。

スケジュール 第1部 13時20分～開会の挨拶：中島貞夫、司会進行：藤岡幹嗣、「玩具映画」の紹介。

玩具映画プロジェクトの経緯：太田米男、玩具映画とは？：松本夏樹、玩具映画の復元工程について：太田米男、甦る映像・玩具映画のスターたち：太田米男、第2部 15時00分～、甦る映像・日本ANIMEのルーツ：松本夏樹、実演・玩具映画を楽しもう！：松本夏樹、錦影絵の復元報告：藤岡幹嗣、新たな錦影絵の試み：池田光恵と芸術計画学科「アート・プロジェクト」学生有志、玩具映画プロジェクトの今後の展開：太田米男。

この発表によって、このプロジェクトの意図と方向性を理解して頂けたと思う。過去のものとしての玩具映画や錦影絵が、大学のプロジェクトとして、復活を遂げるとともに、伝承芸能として、また学生参加の「錦影絵」では、我流ながら、「番町皿屋敷」を実演し、学生参加に

よる新たな芸術展開として、大阪芸術大学らしい講座に発展する予感となった。今後、復元した種板と風呂を用いた「錦影絵」の究明の段階に入り、アート・プロジェクトなどでの活用を図ることになるだろう。

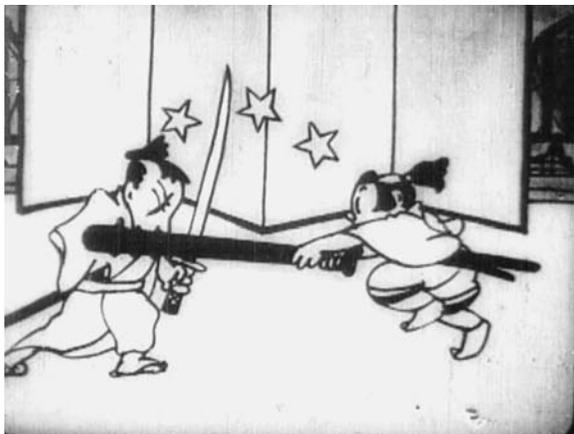
もちろん、玩具映画の収集と復元は、本学博物館の貴重なコレクションとして充実するよう、今後も継続してゆく。



「元禄快拳・大忠臣蔵」



「中山安兵衛」



「日の丸旗之助」